徒然草明汗稿　一

隨筆

内閣文庫
和書 類
一八七二 號
五 冊
二〇三 函
一八 架
120

内閣文庫
番號 和 18711
冊數 5（1）
函號 203 120

徒然草明汗稿ありて寫せよと示けるやいか
かれも析しぬれ半片筆子ばいとしき
も兼好法師書けしね辞稀しやと一向見
侍けるに法弟ては亦いぬりしかの方も有しば古人
試書られし真境に至請けるものやいうはしのみ
獨まもりてよとひきれを今筆に此解ば不用
年比れまつひばこれみ文先生にかのかききて

書籍館印
日本政府圖書
淺草文庫
和學講談所

神の道歌の道深く尋ねけるかれしあまり
儒釋老荘の書ともうかゝひて常に此書の何ぞ
の道にもかなひてけれは歌の跡つゝ柳本の
書を人の好ともてあそひ又名をし多人の評註
其数おほかるもいふてをしき精妙未ゟ聊
ものを記されしよ神儒をかへて正し行ける
いかにやや聞しかは是非を今は人よあるに

まゝ後しく釋老荘何ぞの道よおかしける名らきかし名其
道よしけらきるの紙せむ玉のいかよし理せける
は死亂のいかし屑せさ[illegible]共よ撲よいよ
かさは人の好む室哉肩よ添ふ猫は室家のみもせ
のら寂ひられし数個の猫は其門とかへ入るも〳〵
宗廟の哭百友の嗚かんや養ひられさ
しや鶏を割よ牛の刀は用ひさしもかれける

は世に廣く行ひ称りしとぞしか傳れと雖初に
蜘蛛は鎔ん爲に津まる菜種といひて後世に
残さんとかてをいふを行へまでも此われらがかく
とりまき儒釋老荘の道にもうとくいりしやのをあひて
身に味ひかたき初学の迷ひは解んしとて拵かく
版に卒せんとおもふ人のあやまれるを称に語と經
神傳家にをさめんあるぞやし

正徳六年丙申三月下旬

墨江祝部田中光世謹序

徒然草明汗稿序

或過予蟄戸驟然問曰聞說聞者講述徒然艸然歟曰然客曰子每不肯此書所書動穿於兼好之鼻矣帶吝胃中而言言三寸者非乃逸口哉噫聞惟腥而招嘲之媒也曰子之詰實有處矣爲子解嘲盖

今世風情珍賞此書甘肥其文其
講也雷同朝野其鈔也積牒書肆
而屑有辭耳故有衆予講習之餘
而請講於此書者固辭而不容曲
意狥物撥眥攤冊而已幾夫心哉
客曰若然則有不肯底穿鼻的之
確論且諸鈔遺失之訓解願言明

汙以記之雪其閒解其嘲可乎因
塞其需肆筆分曉焉嗚呼好也好
也飽我毒手

正德第五乙未冬十一月既望
平安城下處士高迩文識

徒然草明汗稿一

今按ずるに吉田の兼好法師が事跡園太暦（花園左大臣 係有仁公記）に
あまた所載りまで。生涯没後其誉も鮮りしは但
草子は一部首尾して兼好が編りとおもふハ大なる相
違也。西三條三光院殿御作の崑玉集に云、兼好法師
ほまく兼ハ甚世するハ志るものなかりしとかいへれハ
の令松丸今川了俊のもとよはりくてありしに兼好
をしや哥など残る。作の物やあるとたづねしに。
書捨をし藻塩草あるハ哥の反古居おとし兼もつ
がりやおほくハ庵の壁にはりまぜてはおくもれハし
まぜとしらげかゝる重宝ともかたみまもとまくを
へりとりまとめれバそれを[?]継させよとて吉田

の感神院へハ令松丸をつかはし。伊賀ハ宗養へも
従者伊豫太郎光貞といふものを寄けり。志ありとてつ
かハされしが。これ亦とりて寄の集ハ伊賀の宗養の庵
にてやう〳〵五十枚ぞうつしける。かくて宗ハ吉田
にて宗養ありしハ壁にかきつけたるハ経巻などを写し
をのせしうら書までありしを取て来りぬ。それ
より後令松丸などしるしそろへ。令松丸が中にも
ましても又二条の侍従のうちにみかハされしかど
さひわひなり寄の集一冊とし又草子二冊とせし
世にはまじくなるまでとも出いでせし。御意がうけたまは
おりしろくわたされぬ紀によなぞへてはまじく
草といふ題号ハ付けられざりとみえたり。又一部

の體儒釋道と納得了解して。文法ハ源氏物語清少
納言が枕草子などにもよれりといへど。それハ今に似たる
真諭なし。たゞ慕好(?)ひかのかたちをも窺ひ得て名
ある者なれば。虎を似うつしひたるかんハ賞せられざら
ざるべし。儒釋道においてハ聊評さるゝまじく
しかれば儒の掟にたがへる事ハ猥りにかへ。釋教も亦
小乗劣機の法にして凡愚なるものなり。老荘のうち
もし書記しぬれども。彼書乃おもむきは和語とも
おかずに而も。渠が文盲にそてハ句読もおぼつかなく
そぞろまゝ。さしもより儒門にうとく。且神祇祠教
の家に生れながら。神道においては九牛が一毛もハ
うちかれる者にハあらねども。されど廣く人にそしり

ひらきそ。先人の註解は或は不相應なるも
大なる面目也。柳明遠の人の鈔出すべき書それは
あらざるべくや。惣て後人の加筆も亦多かるべし。
蓋譖言妄語も強に道理をたすけぬまゝにされいふ
さりとみゆるなるべし。志あらんはわきまへ古語本書な
どふまへ。あるは凡庸の小補ともなるべき條はいかに
まにはあらざるべし
つれづれなるまゝに日くらし硯にむかひて心にうつ
りゆくよしなしごとをそこはかとなく書つくれば
あやしうこそものぐるほしけれ
是則此書の序なる也。但まへの詞と註をせ
らまうしわきまへそれは下につゞく意なり

よや。いへど徒然なるはそのまゝにて何事もなきぞ。
目と書し、またかたちを言語解に注の字を猶述
ゐがうし。しかしおほくは卑下謙退
の詞なるべけれど予が眼には真実に一部まで
しかる事といへるとぞ

初段 いでやこの世に生れては願はしかるべき事こそ多かめれ
御門の御位はいともかしこし。竹の園生の
末葉まで人間のたねならぬぞやんごとなき。一の人
の御ありさまはさらなり。たゞ人も舎人など給は
るきはゝゆゆしと見ゆ。其子むまごまではふれにたれど
なほなまめかし。それより下つかたは
ほどにつけつゝ時にあひ。したりがほなるもみづからはいみじ

と思ふらめどいとくちおし。法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。人には木のはしのやうにおもはるるよと清少納言がかけるもげにさる事ぞかし。いきほひまうにののしりたるにつけていみじとはみえず。増賀ひじりのいひけんやうに。名聞ぐるしく仏の御教にたがふらんとぞおぼゆる。ひたふるの世捨人はなかなかあらまほしきかたもありなん。人はかたちありさまのすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ。物うちいひたる聞にくからず。愛敬ありて詞おほからぬこそあかずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の心おとりせらるる本性見えんこそ口惜かるべけれ。人品かたちこそうまれつきたらめ。心はなどか賢より賢に

もうつさばうつらざらん。容こころざまよき人も才なくなりぬれば品くだり。顔にくさげなる人にも立まじりてかけずけおさるるこそほいなきわざなれ。ありたき事はまことしき文の道作文和歌管絃の道。又有職に公事のかた人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手などつたなからずはしりかき声おかしくて拍子とり。いたましうするものから下戸ならぬこそ男はよけれ

過去現在未来とたて。権化門に泥著せず西方の甚き也。古今集真名序に人之在世不能無為思慮易遷哀楽相変などいへるはやさしうたてそ閑寂もさそ称がりし事の部に。天位并に摂関と

ド都さりもいかがや。異国ハ志らず我朝にそ凡俗
の天子位を称じ玉ふハ往々にそあれど一人の字ハ
まれにも和漢用る所別也。職原鈔に執柄必蒙
一座之宣旨故称一人。又云所生一人とかいて摂関を云
礼記 泰誓曰爾其孜々奉予一人。恭行天罰。又
玉藻曰凡自称天子曰予一人とかいたり
人よいへしことる法師を誹りたるやうなれど
枕草子にさるハ法をたのもしきさまなさといへるを以
に合なるもいふべし法師のふるまひ世にめでし
らるを譏じたるハ兼好を貶しども是も此を
とよんざるもわるべし。兼好既に行ひへり。當世の権勢
ありくしき師直よハ随逐せるや。文盲とてハ貌

心ざあまき人も他よあひさるゝとハさかんそ侍きと
うくまで合点せし兼好々のごとくの文盲いふ
うしくちそ

二段

古の聖乃御代の政をもわすれ民の愁国のそこなふる
為をも志らず。万よきよきらを盡していみじと云
所せきさましたる人こそうたておもひ所なく見ゆ
衣冠より馬車よ至るまでおのに志たがひて用ひよ
美麗をもとむる事なかれとぞ九条殿の遺誡
にも侍る。順徳院の禁中乃事ども書せ玉へるにも
おほやけの献り物ハおろそかなるをもてよし
とすとこそ侍れ
此段尚書などを用ひたりと見ゆ聖の字をひじ

聖と和訓せるハ非を知の義といふ説あれども非ハ
音也古訓に音を用ひたる事なし且非と知ふ
程の事ハ至愚の人ハ格別庸人も知べければ聖の字
にはいふべからず是ハ日を知といふの義是に近し
日本紀神代巻に霊異の二字をくしひとあやし
と訓ぜりまさしくくしひじりの義陰陽不測の霊
妙に通ずる神聖の徳を誉ありての詞也といふ
とすることも法師などをしなべてひじりと称する事
雲泥の相違也但死骸を墓所に埋み又ハ火葬
の執行ひする者をおんばうともひじりともいふ
おんばうハ御坊の義にやひじりハ火知にして
火葬を執行ぬゆゑとかやすべての法師をひじ
りといふハ彼ノ御坊より推及ぼせるの称なるらん
おほやけみん——忌部ノ廣成が古語拾遺にも
故神物官物亦未分別と記して上古の質素
をいふ又禮記礼器篇に有以素為貴者といふ
語あり

三段 萬にいみじくとも。色好まざらん男ハ。いとさうざうしく
玉の卮の當なき心地ぞすべき。露霜にしほたれて
所さだめずまどひありき。親のいさめ世のそしりをつ
つむに心のいとまなく。あふさきるさに思ひみだれ
さるハひとりねがちにまどろむ夜なきこそをかし
けれ。さりとてひたすらたはれたる方にハあらで
女にたやすからずおもはれんこそあらまほしかるべきわざなれ。

好色ハ哥道の根源神代の権輿も是よりすぎされば命ミ是を好むで命よりも凡色を好まぬ人ハ万人に一人もなかるべくや好むハ則天地の常にして志らもありてハ身を害まる事にて翠蛾妖艶の大和小学にハ女子婦人の哥書を好ミ艶ふことを甚戒めし是これも儒よりての教なれもいざる事にこそ釋迦法も亦是をいましめども哥道におゐて戀の歌を最第一とするハ子細ある事にして志らを従是を慎むべきの掟也色好むなうらむよといへどもおやすくに好むなしびなるを此道乃最初の詞何まの道にもかれなる後葉あしき方に導るよ似たり

段

後の世まで事心にとゞまれど佛の道ことうとうるるこゝろすべし

此道兼好がおもいを顕はしたる法師の註解也釋迦の方便にも志ずかしく勧善懲悪をことゝ志られぬ事もなべ此道の心を愚昧の人の用ひならずかへしさにハおもざるべかれど暗よ三世をたてく佛を信ずる事も愚癡の悪縁より甚さハおかし凡佛法入来して人を陥溺しのを迷乱せしむるの久しきいうまぞやとみえて修る且大乗小乗の二教なれども釋迦在世乃天竺にて大乗小乗経部を修まる国ハ十が一にして大乗小乗経部を修まるよし玄奘三蔵が西域記にみえてありやなし

仏学者儒者などのいへらんは我道のわざともいふべ
けれど慈鎮和尚の哥に
いふべき哥後の世はありやなしやとなりなんばこそ
ちひ世をいとひんと詠ぜられて新古今集に載
まてり地獄の事なども諸儒の確論なりされバ言永く
いふべきにもあらねど但し釋日蔵絶而見地獄過十三
日蘇息と是ハ延喜帝の遺詔によりて大病を役
たり行基ハ過十日蘇生と甚頓に絶し久
しく蘇り地獄の業因をよく見極て来りて虚
気でも元亨釈書以下に載て恥を千載にさら
も伊勢物語に業平のふれ入あひぞうたにまさく
入てその日のいぬれ時がうたらうして息

出たりけるよし見えたり一盃酒餘り経へしには
急くて地獄へも極楽へも趣かれざやありけん
天下の法を乞なしまで下賤の人ハ天子将軍を
夢にみんぞと此世活さてそとおのれ己が迷つるよ
り種々の相を現ずることを立てて惣じて何
まの道にもわきまへなきことをのありて人を迷
はし財を費さしむ狐に誑されて馬糞を小
豆餅とおもひて甘く食ふる類の多し中々
馬糞と知なバ手にだにふれまじきを是を察
せざるいとはかなき事にこそ法華経方便品
にも我以智恵力知衆生性欲方便説諸法
皆令得歓喜といへりまや歓喜を得せしせ

有なりハ釋迦の本意にハあらざるべし
或問曰此條とかすに劣機の佛法にハあらざるべく
や後の世といふハ佛法の題目にて佛の乃と
次にいはずとも同じかるべきを上の一句ハ内薫下乃
一句ハ外薫とおぼへ侍るにやと見て侍る煩悩即菩
提生死即涅槃即身即佛是心是佛直指人心見性
成佛などいひとゞけたる趣ハ内薫ハあきらかなれど外薫なくと
こゝろへに外薫蹤乃なれバ心事修行も怠りやすかる
よりて外薫とあるべしとおぼへ侍るにや
答曰子が言のごとく助けてみれバ理ありやうなれど
次第を経て説破せん其意に叶ハぬ事のミにて

五段

不幸に悲にしづめる人のうらみられろしかどふかゝか
におりひそみたるにハいりてあるかなきかに門さしこ
めて侍ることもなくおりしくらしたるさまうたにあら
まかし。弥基中納言のいひつたへ配所乃月罪なくて
みん事さしおかえなべし

不幸にし是ハ殊勝にてこそ覚へたれ俗にいふ藥鑵
道心とそ打もたてぬ事也花山院の弘徽殿の女御
乃死別と袞しひ妻子珍寶及王位臨命終時不
随者といふ悲華経とやらんの文を御覧ありて御
落飾ありし後に中務君に遭落ありし事赤染衛門
が栄花物語にみえたり業好も後宮女院の崩御
によりて出家せられし徹書記物語にみえたれど
則ちつくるにかひまりたる趣嬰児の貰ひ泣といふ

ことのにしてそはすしと見へて後世菩提をたのむもしくは云。
悉皆未練大臆病なりハ不欲無道の業也今世に一瞬
一息の心をも發明いさせてとれ刹那の安心とせぬ人
終は繋縛して彼が身に貪して九品蓮臺にやうぐんす
逆つもや爺々ハ地に預けも世に金銀財寶を我ように任せ
よしなきに似たりそのうへ極楽も釈迦の作られ經文
おして数多の年代経めぐるべいとに丁寧なりる作造か
されども漸破壊におよびてん志るわよいうって彼是と
いふたびんもいかぞうの艱難危き達のうたに登ら
ねばいとふばかれなくやけば乃人れいひし諺にも極
楽に到りやうとも不欲心なければ地獄に落べ
しとはおもふべきもなしとてはさよことで思案あれ

おろかなれとにしへよりよろべし一概には論ど
べからず老子經持而盈之章に功成名遂身退
天之道なりといへる類は格別也聖人も國に道ある
時はなれば時をとえりて出入ある教なり論語
公冶長篇に子曰寗武子邦有道則知邦無道
則愚其知可及也其愚不可及也とありて人を
小天地にして万物の霊也天よりかりて極とあたへる
は神聖のたまひし也今日のよくおしみて悪好がこ
ころそぞろに知れたるを僧に問ふ心根性ともに人面獣
心也渠が如くよしとなれば渠が尊ぶ釈迦はいかに
云分別者にて出世して数十年の説法し老荘
も数千万言を述られしはいふぞや人としておのが

まべき者ハ出家して世の為にも人の為にも我
と苦労そなりともなからんハ成ても自己の安閑
ひのミ好むハ蜘蛛の如くなるにひとし

六段 我身のやんごとなからんにもまして数ならざらん
にも子といふものなくてありなん前中書王九条
太政大臣花園左大臣みな族絶えん事を願ひ給へ
り染殿大臣も子孫おはせぬぞよく侍る末のおくれ
給へるはわろき事なりとぞ世継の翁の物語にハ
いへる聖徳太子の御墓をかねて築かせ給ひける
時もここを切れかしこを断て子孫あらせじと思
ふなりと侍りけるとかや

釈迦法にハ恩愛を断してこそおしへり況子孫
の断絶せん事を願ふといふ趣ハいまだ見聞侍ら
ど聖徳太子ハ好ミ給ふハ都て仏にも帰し断見
にてこそ侍れ又末とく為とばかりも思ひがたくや
まづ瞽瞍の子に虞舜あり相国清盛の子に
重盛あり和漢考へ合せバいくらも侍るべし大
やう鳶が鷹を生むなどいふハ稀なる事にハあれど
兼好が老荘を思ひぬ事ハ是等までも量知を
べし子孫のよくきたるハ父祖の誉まれにさぶらふ
ぞ天照太神の御苗裔に武烈天皇などいふうに
して侍りしかバよくて物の訣あらんといふべし
荘子がいふ労して切なる事也子孫乃善否と
拘はらざる勤労名聞よりこそ是則兼好が為

と諡し給ひて称し給也　聖徳太子と御名
はよろしけれど聖徳としてハ恐ながら既に
崇峻天皇を弑まゐらせし蘇我馬子とその儘
まじはりし事いかなれバや佛法荷擔の方
人なれバ是私ふひいきの也好而知其悪悪而知
其善しそハ聖賢をもいましめ給ひし事を弑せる逆臣
と誅せざる理釋迦の法よありやいかに是ハ佛法
入来の最初にして纔に馬子是を好むが故太子幸
にして誅を免まぬかれたりとかや太子の僻ふ
よハ佛法崇尚のあまり大行不顧細謹の意
まそれも何ろべけれどもいづまでもまゝしけらばや
馬子が無道不仁を誅しあたはざりし因果経

べりけりして忽太子の御子孫よ報ひ有り又子孫を断んと
て墓を築くに此彼とたちこまりといふも恐ながら
男女交合せざれバ子ハなき事をもろし先さてとる
や莊子應帝王篇に衆雌而無雄而又奚卵焉と
ぞり是程の小智をそ孔子小賢之才ありにありなれど
のおひしハ道よ於て甚不遜孫絶よこそ仏も婦抱と
好て志ゝも子孫を断んこそ墓を築いまうにこそは
まれかしちとたてといひまり名目くらしきや是則
莊子漁父篇に人有畏影悪迹而去之走者こらひ如
欲却歩而及先人こ孔子家語よみえ近思録に濂溪
先生乃語を引て如護疾而忌醫寧滅其身而無悟
也こ乗たるに同じされど佛法乃擁護ありや太子なる子

共に子孫ハ断絶しぬ太子ハ其ノ御子山背王ニおゐて
蘇我入鹿がために妻子一族二十五人まで滅ぼされたまひ
ぬ馬子ハ其ノ子入鹿と共に悪逆増長して一族誇り
奢りおごり威しき子孫を断んとの志ありて其系
ひハ遂給ひしかども断絶したり御しむるゆゑ
されや子孫たちまちに乃苦患ハさしおく甚便な
けれど当家威銘ハ殉善なれバいふべからしむくそれ堪
聖徳太子ハ御叔父崇峻帝を弑奉れる馬子ハ与に
天を戴ざれ讎なれども捨おきて論じたるにもたらず
彼大逆無道の馬子を家来佛を尊ひて荷擔せし者ハ
いかんぞ比にまでに馬子守屋が何御し忠不忠ハ
此后もなる事なれバ是を辯ぜんハまたありて守屋を
忠臣といひ僧徒ハ守屋を地蔵菩薩の化身なりとなどゝ
さまぐにいふ事也すべて唐の書のことなりしを
うつしひきて會辯すれども本朝の事跡うれ
暗くして和語の通ぜざる異國人のやうなる
類多し浅ましき事なりさて抑人皇三十代欽明
天皇十三年壬申十月百濟聖明王使を遣して
釋迦の金銅の像幡蓋若干經論若干巻を献る
別に表をたてまつりて流通普通せしめて礼拝恭敬の功
徳を讃歎して曰是法ハ諸法の中に最殊勝にして
難解難入周公孔子も尚知る事あたはずと云々
今按ずるに周公孔子も佛法を會得し給はず
とはいかに頑愚なるいふ始く舎てそれ周公旦ハ周の

成王の末に没しぬ。此後凡六十餘年經て周の昭王の廿六年に釋迦天竺に産誕す。孔子は周の敬王の四十一年に没しぬ。此後凡四百九十餘年を歷て漢の成帝の時に佛法漸中華に入る。重明王が表も亦此書れ小野道風がかける朗詠の類多くあるべき總たり。舍人親王のかゝれましに記し給へるもの蓋意かるべきにや

此法は無量無邊福德果報を生じ乃至無上菩提を成す。譬ば人の意に隨ふ寶を懷にせるが如し。用る所の志にしたがひてことごとく隨れ侍りなり。此妙法の寶も亦然り。祈願は志にしたがひて足ざるなし。且丈遠くは天竺より三韓に洎び教に依てうけたもちて尊敬せずといふ事なしと云々

是日天皇聞食て歡びをどり使者に詔してのたまはく。朕昔よりこのかたいまだ曾てかくのごとく微妙なる法をきかずといへども自決しかたし。群臣に向て曰。西蕃の献れる佛の相貌端嚴し。全くいまだかつてあらず。禮すべきやいなやと。蘇我大臣稲目宿禰奏して曰。西蕃の諸國ひとへに皆禮敬まゐる。豊秋津日本豈獨背きたてまつらんや。時に物部大連尾輿中臣連鎌子同く奏して曰。我みかどの天下に王として御座すは恒に天神地祇社稷乃百八十神を以て四季

を追て祭祀ゐや礼ふかゝりしを事としるす
今按ずるに詩経小雅天保ノ章に禴祠烝嘗礼
記王制ニ曰ク天子諸侯ノ宗廟ノ之祭リ春ヲ曰ク礿夏ヲ曰ク禘
秋ヲ曰嘗冬ヲ曰烝又鍾繇ガ千字文ニ祭祀烝嘗周
興嗣ガ注ニ曰ク四時ノ祭祀先祖ヲ禴祀烝嘗ハ四
時ノ祭ノ名春ハ禴永ニ其ノ生ヲ夏ハ祠祈リ其ノ長ヲ秋ハ嘗賀ス其ノ
熟ヲ冬ハ烝報ス其ノ恩ヲ
方に今改めて異国の神を拝し給はゞ恐らくは国
神の怒りを致さんと天皇の曰く宜也彼が欲する人に授
けんとて稲目宿祢をして試に礼拝せしむ大臣
跪受て悦びて小墾田家に安置し懃に世をお
さめ業を修て因にそれ向原家を浄めはらひて寺
となす此後国に疫病流行て人民夭死を
なすの日月を歴て愈多し治療の及ばざれば
今按ずるに佛をほとけと云ふの和訓は是也
ほとけ也と貝原氏乃[illegible]始まりけり
煩熱の義也
物部ノ大連尾輿中臣ノ連鎌子同しく奏して曰く昔日
臣等が計を用ひたまはずして斯の病死する事を致
せり今遠からずして本に復らば必ず慶びあるべし
宜早く投棄て懃に後の福を求め給ふべしと
天皇然りとしたまひ有司に命じて仏像を難波の堀
江に流し棄させたまふ
今按ずるに摂州西生郡の堀江にあらんか大和ノ国

高市郡に其處あり和事始に同し
復寺〻に火をかけて焼けれとも更に像りなし
三十一代敏達天皇十三年甲辰又百済より弥勒の石
像別に佛像各一軀を持来る者あり是歳蘇我馬子臣
二ッ佛の像を請じて善信尼以下三尼を敬ひ又石川
乃宅に仏殿を修治して佛法の初る事茲よりし
こゝり作きつる

同十四年乙巳又疫病行て死まる者多し今年三
月朔日物部弓削守屋大連と中臣勝海大夫奏し
て曰ク何故ぞ臣等が言を用ひ給はずして考天
皇より陛下に及ぶまで疫病流行て國民絶ぬべ
し豈に蘇我ノ臣が佛法を興し行ぬにあらずや

と則詔して曰ク宜く佛法を断絶まべし當月晦
日物部弓削守屋大連みづから寺にいたり胡牀
に踞坐て其塔を斫倒して火を縦佛像仏殿
を燔餘りの佛像を取て難波乃堀江に棄しき
是日雲なくして風吹雨降守屋大連被雨衣せり
馬子宿禰と従て法を行つる人等を訶責て毀り
辱しむるの心を盡しむ乃佐伯造御室といふ者
を遣して馬子宿禰のいつきまつる善信等の尼を
喚る是によりて馬子ノ宿禰令に違ふ事をえざれは
たゞなげきてなく〳〵尼等を喚出して御室に付
く有司便尼等か三衣を奪ひ禁錮て海石榴の
市ノ亭にして楚撻き

今按ずるに仏法を弘つる人々をも責てやね
至るべかりし世なるの叫ば知しめ剃へ三尼を市
に笞事など彼等が私に佛法を修したる
ものなれど是程のはりき僧ハ責僧ども也ん
いふ地蔵菩薩乃化身の守屋にハ不相應乃
所爲俗よりいふおしなげるさ仕形成べし
同年秋八月十五日天皇御悩おもりて崩御まし
ゝしと是時殯の宮を廣瀬またの馬子ノ宿祢大臣
刀を佩て誄奉ル
今按ずるに誄の和訓志のびごとハ慕誦乃意也
古代の挽歌薤露蒿里など今俗よりいふ追悼
乃詩歌の類也

物部ノ弓削ノ守屋ノ大連听然て云獵箭をおへる雀
の如しと次に弓削ノ守屋ノ大連手脚揺震て誄
たてまつる馬子ノ宿祢ノ大臣笑ひて曰ク鈴を懸べし
是によりて二ノ臣微く怨を相生と云々
右日本紀のおもむき也是等のふるまひ二ノ臣
共に甚宜しからず俗に時も時節も節と
いふものにして名僧智邪倭のいたすを也此
外にも司馬達といふ法師が乞食のよふ佛
舎利を得たりとて馬子にまいらせしかバ識に
鐵の質のうへに置て鐵乃鎚を振て打其ノ
質と鎚とハ悉く砕けぬれど舎利ハ毀
なかりし事あり今按ずるに是ハ金剛石

すてにそ傳るか凡ッ舎利ハ釋迦の死骨也穢
らはしき物也牛馬乃死骨ハ上もまさる事なし
ましく益なり人の死骨ハ牛馬に劣まさり
但し靈天蓋のミぞ藥となる人死して舎
利となる事聞あるすまじそ且石淋を患
へて石塊あり彼牛之黄狗之寳馬之墨鹿
之玉犀之通天是名く病なるよし本草綱
目に時珍是を辨せり又死胡に服せる藥乃
性によりて死灰舎利と成事なりと或人
の語りも語りしなやしき事にハあらねど
人死したるハ人死したるやうなるを
ぶかしき異類とふべけれど是が相志れ爲

者佛を忌事火を避るがごとくなりしが其ゞ
隣に仏を好む事飢たる人の食を求るが
如きなりし門を同して常に甚不和なり或
時彼仏嫌ひの男佛好の家に語ひたりしに
ありくしくもありしらねど時に仏嫌ひ乃
男彼土舎とふもの物ハ死したるものに
ありくれば綿の如く成といふ奇妙の物と
聞つるさなどとへ其時亭主数をわざみて
さてハ甚しき成ある奇特千万の事也とん
ひて甚そそなし仏法のなりがたき奇瑞
でも語り聞せしを彼男いふにも合点して
聞居たりさて帰らんとして云やう彼土舎

とおもひありし折ふしはてとしよ亭主の云いう
にも進らせはさんが今はと死人までもはや
とはゞ菰へてされば今日乾鮭を求得
たりけるを漬したるばかりにては埒があかね
此事は土舎を振起さんと存ずるといふ
是より又孫不和になりけり又敏達天皇十四
年に天皇大連とともに瘡を病て死する
者多し其瘡を患ふる者の言身焼るゝが如く打
れ摧るゝがごとしといひて泣伏て死する老弱
ひそかに相謂て曰是は佛像を焼まいらする
罪なり今按るに此屋大連なども是を
けり瘡を病て死する者其事は閼らざ

皆者殊に多かるべしされば愈信じて益な
きや既に此時かくのごとく世の人のおもひを
迷はしけるの甚しき悲哉末の世に到りて
いかばかり歎くとも此非を改むるに便りなから
んや凡佛法入来此かたの人は貴賤賢愚とも
なく地獄に堕在るべきさや彼釋氏みて黄
檗百丈に問古人錯祇對一轉語堕五百生
野狐身轉々不錯合作箇甚麼といふ事は
無門関百丈野狐の話並に又燈會元禅林
類聚等に見えたり又金剛經に過去心不可
得見在心不可得未来心不可得といへるは
いはれるゆへは地獄極楽の苦楽にあづからん

右のごとくなれバ馬子守屋が不和なる一朝ア
タのまにハおよバず二臣各重職に補して
一旦に天下の権を争ふとあらバ馬子若佛法を
忌バ守屋必好むべきに當まり又馬子ハ君を弑
し国に災なすしむるれ乱賊なれども浮屠
己が方人なれバ彼が非を文る但し事實ハ
去るまじや何ん守屋ハ私の宿意を以て終に
朝敵と成る臣逆臣也忠なれバ太子を諫めて用
ひられざる時何ぞ潔く死を究めざる二臣
各罪あり但し守屋が佛を排せし心のむかふ
ハ免もなしまし兎も角もあれ專佛法を息ニ奉拝
神祇をはる倭姫命の聖教よふるひねまそ

私の宿意によりておのづから朝敵と成れ
罪而已馬子も罪乃軽重を論ぜバ守屋
ゟ尚軽くこそ侍れ人〻是を考へて二臣と是非を
ふ事なかれと

七段

あだし野の露消る時なく鳥部山の煙立さ
らでのみ住はつるならひならバいかに物の哀も
なからん。世ハさだめなきこそいみじけれ。命あ
るものを見るに人ばかり久しきハなし。蜉
蝣の夕をまち夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞ
かし。つくづくと一年をくらすほどだにもこよなふ
長閑しや。あかずをしと思はゞ。千年を過すとても
一夜の夢の心地こそせめ。住はてぬ世にみにくき

姿を待えて何かハせん。命ながけれバ恥多し。なが
くとも四十にたらぬ程にて死なんこそめやすかる
べけれ。そのほど過ぬれバかたちをはづる心もなく
人に出まじらハん事を思ひ。夕の陽に子孫を
愛してさかゆく末を見んまでの命をあらまし。
ひたすら世をむさぼる心のミ深く。物の哀も知ず
なりゆくなんあさましき

鴨の長明ハさせる哥人なりしかど方丈記を
大聰落と見しより以下に見れとしれる此随
も四十にたらぬ程にて死んなど命ハ天にま
かすべし人の私なる所にあらず兼好が六十
八歳ハいかにぞや荘子大宗師篇曰死生命也
其有夜旦之常天也といへりされバ兼好がいさ
か世語にして見ぬ老荘の前るを思ひざるハ證也
又釋氏にハおゐて此義行りやいふうし書經庚盤
上曰遲任有言人惟求舊器非求舊惟新とく
淮南子泰族訓にも帶ハ不厭新人ハ不厭故處地
宜也とかきたり

八段 世の人の心を惑す事色欲にハしかず。人の心ハ愚なれ
なる物なれ。匂ひなどハ假の物なるに。しばらく衣裳に薫
物すと知りながら。えならぬ匂ひにハ必心ときめきする
ものなり。久米の仙人の物洗ふ女の脛の白き
を見て通を失ひけんハ。誠に手足はだへ
などのきよらに肥あぶらづきたらんハ外の色なら

らねバさもあるべし
此段色欲をいましむ殊勝なりとぞ詩経に膚如
凝脂歯如瓠犀とかきたるを取なせり張文成
が遊仙窟とかいへるを此段も今少おもしろきを
よそへりしてあり

九段 女ハ髪のめでたからんこそ人のめたつべかめれ。人の
ほど心ばへなどハ物いひたるけはひにこそ物
ごしにもしらるれ。ことにふれてうちあるさま
にも人の心をまどはし。すべて女のうちとけたる
いもねず。身をおしまず。たへがたき事にも
たへしのぶハただ色を思ふがゆへ也。
まことに愛着の道その根ふかく源遠し。六塵の
楽欲おほしといへどもみな厭離しつべし。其中に但かの
まどひのひとつやめがたきのみぞ。老たるも若きも智
あるも愚なるもかはる所なしとぞみゆる。されバ女の髪
すぢをよれる綱にハ大象もよくつながれ。女のはけ
る足駄にて作れる笛にハ秋の鹿必ずよるとぞいひ
伝へ侍る。みづからいましめておそるべくつつしむべき
ハこのまどひなり
此段女の情をよく述て又人畜共に彼に役せ
らるる事をいへり

十段 家居のつきづきしくあらまほしきこそ。かりのやど
りとハ思へど興あるものなれ。よき人ののどやかに
住なしたる所ハさし入たる月の色もひときはしみ

みじと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならね
ど木立ものふりてわざとならぬ庭の草も心あるさ
まに。簀子透垣のたよりをかしく。うちある調度を
昔おぼえてやすらかなるこそ心にくしと見ゆれ。多
くのたくみの心をつくしてみがきたて。唐の倭の
めづらしくえならぬ調度ども並べおき。前栽の
草木まで心のまゝならず作りなせるは見る目も苦
しくいとわびし。さてもやはながらへ住べき。又時の
間の烟ともなりなんとぞうち見るより思はる
ゝ。大かたは家居にこそことざまはをしはからるれ。後
徳大寺大臣の。寝殿に鳶ゐさせじとて縄をはら
れたりけるを西行が見て。鳶のゐたらんは何かはくるし

かるべき。此殿の御心さばかりにこそとて。其後は参ら
ざりけると聞侍るに。綾小路宮のおはします小坂殿の
棟に。いつぞや縄をひかれたりしかば。かのためし思ひ
出られ侍りしに。誠や。烏の群ゐて池の蛙をとり
ければ。御覧じかなしませ給ひてなんと人の語りし
こそ。さてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺
にもいかなる故か侍りけん

家居の行申し兼好物好有繫むかしこそ後徳大
寺殿下見筈ハいかにも人の思ひをも成給ふべし

神無月の比。栗栖野といふ所を過て。ある山里に尋ね
入事侍りしに。遥なる苔の細道をふみ分て。心ぼそく
すみなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝ筧の雫な

らでハ露おとなふものなし。閼伽棚に菊紅葉など
折散したる。流石にすむ人のあれバなるべし。かくて
もあられけるよと哀にみるほどに。かなたの庭
に大なる柑子の木の。枝もたはゝに成たるが。まはり
をきびしくかこひたりしこそ。少ことさめて此木な
からましかばとおぼえしか

此段さもこそと覚えたれど始めの程に泥着なき
ありやうを後に見ざらまほしき事ハ出来るにこそ是等
の事ハ大人君子の眼を付まじき事なん佛家の
嫌ふ有相執着ハ兼好が生得也

十二 おなじ心ならむ人としめやかに物語して。をかしき事
も世のはかなき事も。うらなくいひなぐさまんこそう
れしかるべきに。さる人あるまじければ。露たがはざらんと
向ひゐたらんハ独ある心ちやせん。互にいはん程の事をバ
げにと聞かひあるものから。いさゝかたがふ所もあらん人こそ我
ハさやハ思ふなどあらそひにくみ。さるから。さぞともうち
かたらはゞ。つれづれなぐさまめと思へど。げにハ少かこ
つかたも我とひとしからざらん人ハ。大方のよしなし
ごといはんほどこそあらめ。まめやかの心の友にハ。はるかにへだ
たる所のありぬべきぞわびしきや

同心の友あらば心をなぐさむるも先ハさることなるべし
但業平朝臣の　思ふ事いはでぞたゞにやみぬべき
我とひとしき人しなければと詠ぜし如き我の一
字ハ無我の我也。故に人の我をさへ勿論同じ

うへに栽わしきに人のよ作も亦同じかりしの世迄
兼好が此道ハ我が三昧となして以ましこ絶まえて信
にいはれたるに兼好たるとる物也又是に然る君のことを愛
して已に質まる人をば強ひて学問まる事を嫌ふとぞ
又ハ兼好が固陋にしべし全く何ぞの道にもすれ
ひ作るなし

独りともしびのもとに文をひろげて見ぬ世の人を友と
するこそこよなう慰むわざなれ。文ハ文選のあはれ
なる巻々。白氏文集老子のことば南華の篇。此国の
博士どもの書ける物も古のハあはれなる事多かり
兼好白氏文集を信ずるよしハ文選のあはれなる
巻々とよまざるによはごとし既に老荘の二書も見

得ざりし事ハ前後に渲説を兼好がことに彼書
を読く字行もよむまじくぞ見ゆる也文選の行
なれなる事も此書一部に曽て見へず斷百四十
五篇に籍田賦沛艾の二字を出せるのミにて
外題学文なる事款冢とべし此国の博士のかけ
るも予が如き管見蠡測也へしや仮名文とても援
群疑も多かるべけれど真名に至りては皆彼白
氏が風に似せんとして卿なれども兎角に慢よ
く肥むづかしきたる長短く色黒き女の下坂に
白粉を施し薄しき紅の皿をとるやう出つけて
田舎模様の衣もいとなきまさ衣服をて粧ひ
たるに似たり凡ッ真名文とても近代ハ古よりも勝るべ

されや惣て詩歌共に名句の所といふものはさのみ
理窟臭き事侍らねども只有變物爲初下更云
事到心中といふは理屈といひ張りたるといふ物にや
是を總て理屈はいはぬもの也とかくべし。彼杜子美が渭
北春天樹江東日暮雲といへるは理屈ありや。文君の
かのほのぼのと明石の浦て添ぜられ業平も
月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの
その身にしてなどさまでもなしに理屈はありやされ
ど定家卿は詠歌大概には雖非和歌之先達
時節之景気世間之盛衰爲知物之由白氏文集
第一第二之帙常可握翫と此卿の細註に深通
和哥之心と記し給へり是は彼集俗なる由也

和歌と好せぬ人見易きゆへ依てなり楽天が
詩は俗なりとしては詩人王眉が八同中十六など
に見へたり處に程箸杜甫が詩集を見ずして定
家卿ほどの達人白氏文集とは挙られまじきにや
彼ごのは時分には世にも杜甫が詩流布せざりし
にやとみえたり

十四

和歌をも嫌はれしき物なれ。あやしの賤の山賤の
者までも言ひ出つるにはおもしろく花を見しき猪も
あるをみれば床とはばやはしくなりしぞ。ばかの所は一度
しれりしいひあへたりとて絶るはあれど。ふるき所ど
もみれりにいふれぞや言葉の外に心をきく気
おぼゆるはあし。貫之が紀のよまる物なりけると

いへるハ。古今集ハ中乃哥くだりとやいひ侍らんされ
ど。今ハ世乃人のよみならふべきことがらハ見えねバ。其世
乃哥にハ姿詞このたぐひ乃ミ多し。此哥よりぞかはりて
うたいひたてられたるも知られし。源氏物語にハ物とも
なしとぞ見ける。新古今にハ残る松さへ峯にさびしき
と云る哥をぞいひあへるなまめかしく出るだけある姿なるも
やゝあらはされど此哥を衆議判ハ時宜しかりし
沙汰ありて。後にも殊更に感じ仰下されけるよ
し。家長が日記に見えけり。哥ハ昔のと古へハかはりた
れど。いふ事ハ同れど。いにしへや今もよくあてたれど
詞哥枕も昔の人ハよみあへる更に同じ物なはらぬぞや
よくすればかはりて姿もさまにげにはなれもふかく

かる也。梁塵秘鈔ハ郢曲のこと葉にて文ハさもなけれ
事ハおかしきも。昔乃人のたくひにいひなしてはるゝ
ちからさも。皆つゞしく同ずるにや
和歌ハ云々妙理ハ白地にいふべくもなけれど葉好ハ
随に記せる抄の優なるといふがゆゑハ事ふハなり
ざるべし。凡わざなる枝藝このむなる大なる相
遠也。抑和哥ハ伊弉諾伊弉冉の二尊より初り
素盞鳴尊の出雲八雲の神詠ありといへども其濫
觴天地開闢の時にはじまりて深きならひ侍る事な
りて神代ハいふても又也人代にありても神代今
殊に風雅の諺言を以て見ば日本紀第九神功
皇后紀に天照大神住吉の三神經津主神事

代主命なとれ御名を顕しまする神託に曰神風
伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所
居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命ハ
照大神
幡荻穂出吾也於尾田吾田節之淡郡
所居神之有也　經津主神　於天事代於虚事代
玉籤入彦嚴之事代神　事代主命　於日向國橘
小門之水底所居而水葉稚之出居神名表
筒男中筒男底筒男神之有也　住吉三神　右のご
とくなれバ人として是を詠ざらんや又和歌三神
といふハ住吉三神の御事也此三神ハ伊弉諾尊
日向國小戸乃橘乃檍原にして祓除しまふ時
生じ給ふ心化の神とそ形なき神にましますと子細

ある事也　和歌の三聖といふハ人丸赤人衣通姫也
赤人ハ人丸同時の人といひ傳ふ衣通姫ハ允恭天
皇の后大中姫命乃妹也人丸ヵ傳なくてハ三聖と立
たる理をしるべからず。なそろしき猶
むね乃やはらぎこれ和国の風俗なれバ万端なから
優に艶なるべからずと哥といふべからず甚體種々也
六百番の哥合に左顕昭　秋河なにし文月さわたし
渡しとも先八十ちも其男も舞さ給へや　右寂蓮
鵜飼舟高瀬さしこそ程なれやむすぼほれ行
篝火乃かげ　俊成卿の判に左歌よりぬさ般ふ左
なれど上の句にいひ出る事ありけれバ右の
ならべし左勝侍らんといへり是一首のうちに風體

にして寂蓮ならに猶程乃歌ともぞ又寂蓮ハ歌を嗜
其體とて新古今に入られ侍るされバ深く歌昭が高
名なるべし又作りて物語しるき歌ハ鎌倉右
大臣なれ　武士の矢なみつくろふ小手のうへに霰たばし
る奈須の篠原　家集に見えたり優なる方と
いへば式子内親王の　忘れめや葵を草に引む
すびかりねの野辺の露のあけぼの　新古今集
に見えたり　此比の歌ハ多し　是ハ流石兼好が心へ
ぬ道なれや三代集より後ハ新古今も己たりと
て定家卿の心にも合ハざりしけれどさやう
乃歌末の世にハ聞えど兼好まではこれ
を枕の世迄此事葉の霜枯にもあらぬ是風の寒

けさしもみて見まがふ枕の兼好と異名をえた
りしぞ此歌新續古今集よりのせたれど耳驚く
ばかりハ侍らじ其時ハこれや秀逸として物なれば
世又兼好が知分のよそれ秀歌として侍らんおぼつかな
し　但しありての秀逸名歌ハ古今遠近と端せる
に思ふ定家卿も記され侍るとや世に和歌の四天王と
て沢田の頓阿　稲野の慶運　湊江の浄弁　を枕の
兼好とふ是等の異名も全く近き比兼好が当代
を慕わしき者のいひ出せる事なるぞ　古くハ見ざる
なり侍らし　頓阿　月やとふ沢田乃西に搖もし鴫の
あかつきに明方ぞ見え　慶運　孱ひまぶ山の稚
野の夕雲雀からうと落る声しきりなく　浄辯

湊江は秋にたてゝる芦のはに夕ぐれさびし浦の苫やぞ
次に兼好が秘れの歌也 但彼正廣(シヤウクワウ)の釣簾(ス)の外
にひとりや月の更ゆらん日比の秘の涙とび〇て
とよみ給ふ日比(ヒゴロ)の面影といふ異名をとられしハ是
摂政の面目也 扨る松主人の歌ハ兼好が難(ナン)じたる
ごとくにても作るべし 但(シ)是ハ疎句(ソク)の歌にや 後(ゴ)
京極(キヤウゴク)のまつりごとくるや 君〇の歌ハ親句の歌
とぞ此類(ルイ)はまされるべし 女まつそくゞけなし
吾等とハ申されましくや 待(?)する親句(シンク)疎句の事
其理(リ)事し繁(シゲ)かれハ略(リヤク)しぬ 貫之が歌ハ物とハなしに
こゝにても此のこゝろの事あるにや 兼好二条家
の習(ナラ)ひなるらし 扨へるさらぬなと見る 条よ

或の歌ハ惣(スベ)て余の縁語(エンゴ)過(スギ)たりとて〇〇まれ 細く
如此(コトカクノ)一首くだりとて見と嬌(キヤウ)に喩(タト)へバ行平朝
臣の立わかれいなばの山の歌 業平朝臣のか
ら衣きつゝなれにしの歌 但是ハ折句(ヲリク)なれハ
格別の事にて余儀(ヨギ)なき波しなからも言
かれの言ハ結句(ケツク)にて今ハかへらんと一揃(テン)し
唐衣の歌ハ旅をしぞ思ふと一揃したるは是
秀逸也とぞ 歌の左ミし 是ハ熊野(クマノ)権現(ゴンゲン)
の示現(ジゲン)と兼好がいひしかりしや西行が夢想の歌も
ひさハ神代より末の世に至りても和歌道の〇
情ハかはらねど也 作者におゐてハ勝劣あるべき
事物の常也 西行ハよく此神託を了解(レウゲ)せし

ゆへなりけといふ情の字をとへて来れ世もいは情盃
ミちをしれと見し夏なすくいよまれたりまし
といふあり弁と案じいる一念は古今一理なる
の義也詠歌大概に情以新為先といふて心の字
を用ひずして情の字を用ひられしは故ある
事也かるがゆへに明辯せずして筆に任て書捨
たるはしれたりし　沙汰乃二字淘汰沙汰を
もおぼしつらんや　字書を按ずるに沙の字は
よ淘汰也ともいふべし系など淘汰とそ水に入て
と浙て擾乱て淘瀝する意也是にして回棄と
犯も事ある君は沙汰に及ぶべきよし令條ある
奥にも記されたるべし

十五　いづくにもあれしばし旅だちたるこそめさむる心地
すれ。そのわたりこゝかしこ見ありき。ゐなかびたる所
山里などはいとめなれぬ事のみぞ多かる。都へたより
求めて文やる其事彼事便宜に忘るなど言ひ
やるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ万に心づかひ
せらるれ。もてる調度までよきはよく。能ある人かた
ちよき人も常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社など
に忍びてこもりたるもをかし
総て古を慕ふ志あるより志ざしぬれ旅寝などある
しきものなりしそ古今集蝉丸の哥に　世中はとても
かくしてよからんかぎりあるとぞ宮もわらや
此心だ人に徹したる人は稀なりや　さやうれ不をそもし

此條にても美妙が云爲と文字などを名目にいたさ
るゝ事なるべし

十六 神樂とて今に及びしくれゝりけれ。打ならす物の音
には笛篳篥。常に用ひたるは琵琶和琴
神樂ハ神代磐戸前にて俳優より起りて神樂加
猿也先神樂の二字ハ音訓相交て用ひたり万
葉書の事を羽林接葉鈔に記する假字義讀の
二ツを相兼たる也かぐらといふ訓ハ神代巻に顕神
明之憑談乃六字をかんがかりと訓ずるより今
すゞらにかくと五音通じてとらと攅音
通じてかんがゝりといふ語也是秘授の訓傳に
て作る又面白れ羽神樂に縁ありとれ傳わるれ

古語拾遺曰當此之時上天初晴衆俱相見面皆明白
伸手歌舞相與稱曰阿波禮 言天晴也 阿那於茂志呂 古語事之甚切皆稱阿那 言衆面明白也 阿那多能志 言伸手而舞今指樂事謂之多能志此意也 阿那佐夜憩 竹葉之聲也 飫憩 木名也振其葉之調也

今按ずるに飫憩ハ相傳の事なれど是ハ荻
也上古草木混雑の例多し荻ハ風なくて
も喧響ぬる也荻乃葉を持て舞事今宮
禁裏に遺法なりとぞ秘説也又文殿鈔
に神記とて引用ひられしハ御鎮座本記也
且中に笛の縁和琴の縁などまてなりゆくまゝ
今この四字をあやくびやうしうちてと然したら
笏拍子打てとなるべかれと義によりて文字と

既あせり但シ前の字とあやしく誤列せる子細あり
事也前備忽瓷の義にて音忽なるべけれど是
とも又意和漢甚異也異國にては意も令
と是に知して忘れざりし然ん名異也
本朝にては身體と直しく正しくあれ異也仍て正
直に立て持ものこそ鬚着は遠慮と江次第に
見えたりこれは氣にさはるとかや但前の字々敬の威
儀なるゆへ合すべしさてあやしく誤列せられば
子細あるまし　桃藥藥葉とも紀しあり但前
骨同音なるとぞ　禅宗に譯て列と入たるに
ぞ云ふ説あり　揮漢土の音と　和朝にて替る
事甚ク習なく替るとも他の列もあるべきことや最

无稽の説也是ハシヤの二字假名切に直れバサと
なるサとスと五音通ど直とふ義也既ニ又一
箇の秘訣也忽にあるべからず直の意則ニ次第の
前と稀作法に合ひ侍る又神宮に於て天兒屋
根命の神體前なるよしなどハ深重の習ハ
侍る事也

十七
山寺にて絶えりて佛にたまふめるとこそまじく
もなくいれ濁りも清まるゆゑもあれ
此段佛道修行の車にれありてハさらにはあるべけれ
但シ一僧ありて雲門に問ふ如何是佛と雲門曰乾屎橛
と答へし事なと蕪好が聞れバ驚て率倒し
てんくとくしく識りまじく不便也

十八

人ハおのれを約にし。驕りを退けて財をもたず世を
貪らざらんぞいみじかるべき。昔より賢き人の富るハ
稀也。唐土に許由といひける人ハ。更に身にしたがへる貯へ
もなくて。水をも手して捧げて飲けるを見て。なりひ
さごといふ物を人の得させたりければ。或時木の枝にか
けたりけるが。風に吹れて鳴りけるを。かしかましとて
捨けり。又手に掬びてぞ水も飲ける。いかばかり心のうち
すゞしかりけん。孫晨ハ冬の月に衾なくて藁一束あり
けるを。夕にハこれにふし。朝にハおさめけり。もろこし
の人ハこれをいみじと思へバこそ記しとゞめて世に
も伝へけめ。これらの人ハ語りも伝ふべからず
此段古賢の行状をいふ。但此段唐土も鮮かりけれバこ
そ如此書したりといふ事兼好思ひしまゝや

十九

折ふしの移りかはるこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれハ
秋こそまされと人ごとにいふめれど。それもさる
ものにて。今一きハ心もうきたつものハ春の気色に
こそあめれ。鳥の声などもことのほかに春めきて。
のどやかなる日影に。垣根の草萌出るころより。やゝ
春ふかく霞みわたりて。花もやうやう気色だつほど
こそあれ。折しも雨風うちつゞきて。心あはたゞしく
ちりすぎぬ。青葉になりゆくまで万に唯心をのみぞなや
ます。花たちばなハ名にこそおへれ。猶梅の匂ひに
ぞ古の事もたちかへり恋しう思ひいでらるゝ。山吹
のきよげに藤のおぼつかなきさましたる。すべて

折ふしにつけて絶事なかるべし。灌佛の比。祭の比。若葉
の梢涼しげに茂りゆく程こそ。世のあはれも人の恋
しさもまさるとは人のおほせられしこそ。実にさる物
なれ。五月菖蒲ふく比早苗とる比水雞のたゝくな
ど心ぼそからぬかは。六月の比あやしき家に夕顔白
く見えて。蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓
又をかし。七夕祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒
になるほど鴈鳴て来る比。萩の下葉色づくほど。
わさ田刈ほすなど。とりあつめたる事は秋のみぞ多
かる。又野分の朝こそおかしけれ。いひつゞくれば皆
源氏物語枕草子などにことふりにたれど。同じ
事又今更いはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは
はらふくるゝわざなれば。筆にまかせつゝあぢきなきすさび
にてかつやりすつべき物なれば人の見るべき
にもあらず。さて冬がれのけしきこそ秋にはをさく
おとるまじけれ。汀の草に紅葉のちりとゞまりて
霜いと白うおける朝。遣水より烟のたつこそおかし
けれ。年のくれはてゝ人ごとにいそぎあへる比ぞ又なく
あはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月
のさむけくすめる廿日あまりの空こそ心ぼそき
物なれ。御佛名荷前の使たつなどぞあはれにや
んごとなき。公事どもしげく春のいそぎにとり
かさねて催し行るゝさまぞいみじきや。追儺より
四方拝につゞくこそおもしろけれ。晦日の夜いたう

園にハ松むしなきして夜すがら遊るまで人の門さきに
もしかゆりきて何事かわらんともしく鈴りかゆ
足をとゞめにまどふが。暁方よりさまかハれ音なくなりぬ
やるらそ年乃名残をおしむかれ。なさけ人の来る秋
とて玉虫するよしさは此れ都にハなきさと。吾妻のかたに
ハ夏よりの事にて侍りしとそわすれまなりし。かゝて
明行空のけしき昨日よりハたのしくハ見えぬかも
ひさゝ人あゆけらしきもてちらぞとる。大路の落松
たてりるしてそれやらに嬉しげなるこそ又おも
しろけれ

此段源氏物語秋好の中宮なとの玄味挍菜子を
模せり但山吹の清げに夜れたれつるなれとも
詠ずる古今未曾有にしておもしろくおぼえり
うに見えつゝかなんさそ山吹といふに款冬
と書ハあしきとれも和哥題の面なれとも
てハ餘義なし　逢着僧居歎久之花と云
も蕗也時節打遠なれバ只山吹と蛙があ
しと先師乃説なりき　あやしき家し
夕顔ハ侍るとれ家ゐハ極め物乃あし　源氏
物語乃秋物緑にもあり　六月祓　禁中ハ
格別の事にて地下にハ晦日に渡しバ南庭
の中ぶよりおひりるし也　後撰集の哥に
鴨川乃水底澄て照月を行てみんとや夏祓
すらとうなり　凡ッ祓れ権輿ハ弟ふ記しぬ

又夜抜ハ火毬金の蘂と見えて叔れ抜にして
夜ごしの抜といへハ夏と越の義夏ハ火なれハ旺
じ秋ハ金なれハ旺せざる所なれハ也又荒和抜と
も萬葉集に和儺抜と書てはらへとよめりへ
とも見えど荒き思邪を和するの意也御公
事根源等に委し多く良問答にも於て
ま記されたり唐にも抜禊の事あり
此頃に新樹又ハ久く枯と冀したるハいふさ故
斯人の眼等閑なりけれど なれ人の成る夜もし
拾遺集乃斯にも見る文段歎ならんには殿恩
經とりまたれど死盡乃来樹に時日と記す
事いとはるかなれし七月に死盡くとあり金す

盂蘭盆經此趣ハ別にして僧自恣の日七月十五日也
百日安居乃僧を供養とる事也 但法苑珠林并
六十二ゐ祖師と供養とる事見えたり文陳叡
謝肇淛が五雜組第二百七月中元日謂之盂蘭
會目連因母陷餓鬼獄中故設此功德令諸餓鬼
一切得食也人之祖考不望其登天堂生極樂世
界而以餓鬼期之乎弗思甚矣抑七月に死盡と
名付て其後躍り戯る事此國乃風俗にして
江州国の驛などにハ十五日の夜老極の男女ハ
扙取せりまて門に出ておどり盡とかぎるわり
さ夜も雨舎ハ久りて懇懃なり佛書にも歓
喜踊躍して祭るの事ハあれど 本朝にて

彌羅もろ其起源久し神代巻曰伊弉冉
尊生火神時被灼而神退去矣故葬於紀伊
國熊野之有馬村焉土俗祭此神之魂者花
時亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣と
みえたりされば雨と花の囃子も生田囃子も亦隠
囃子ともいひて巌重のおりさ後也あのはやし
僧あ下に大般若經を召れ讀やらんにしも
卿ありしより今ハ土俗大般若と稱し作り是又浮
屠れはあれざる事と下して將来の口實と哉
なし世　東國とあづまといふハ人皇十二代景
行天皇の御子日本武尊東夷征伐の凱旋ニ上
野の碓日嶺にて東南を望ミ弟橘姫を忍び
三たび歎きて曰く吾嬬者耶とのたまひしより山東の
諸國を吾嬬といふよし古事記日本紀に見えたり

徒然草明汗稿一終

明汙稿一ノ冊八終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan